

アメラジアン・スクール・イン・オキナワにおける子どもの位置取り —他者との境界線の引き方に着目して—

大 城 亜梨沙 クアラルンプール日本人学校
渋谷 真 樹 奈良教育大学学校教育講座 (教育学)

(平成26年5月7日受理)

Positioning of Children at AmerAsian School in Okinawa : In Focus of the ways of bordering with others

Arisa OSHIRO

(The Japanese School of Kuala Lumpur)

Maki SHIBUYA

(Department of School Education, Nara University of Education)

(Received May 7, 2014)

Abstract

The purpose of this article is to examine how AmerAsian School in Okinawa (AASO) students are positioned relating to others. Based on the fieldwork at AASO, it examines how they make borders between Japanese and American, Black and White, and Okinawan and main landers. It also analyses how they position themselves through popular culture such as cartoon and music. The positioning of children at AASO depends on the context. While they sometimes express more sympathy to American than Japanese, they identify themselves as Okinawan in another occasion. Being Black could mean different depending on who use the word, Black, in what way. Comparing Japanese popular culture with that of America, they select what they think the better. Although popular music could be divided by race, they can change the notion of "us" through their friendship.

キーワード：アメラジアン, 位置取り, 人種, ポピュラー
カルチャー

Key Words : Amerasian, positioning, race, popular
culture

1. はじめに

アメラジアンとは、広義には、「アメリカ人とアジア人の母との間に生まれた全ての子どもたち」(照本, 2001:61)を指す。しかし、多くの場合、より狭義に、「米軍基地を置くアジア各地の女性と、軍に関係するアメリカ人男性との子ども」(重松, 2002:11)を指す。沖縄には、米軍基地が集中しており、今でもアメラジアンが生まれ続けている。沖縄におけるアメラジアンの実数は定かではないが、野入(2000)は、沖縄に居住する幼稚園から高校までのアメラジアンの子どもの数を約3900人、成人を含めると2万人以上と想定している。

アメラジアンの子どもたちは、外見や言語、文化など

さまざまな面で、「自分は何者か」を問われやすい。沖縄には、そうした子どもたちのダブルのアイデンティティを育むために創られた教育機関、アメラジアン・スクール・イン・オキナワ(以下AASO)がある。そこで、本稿では、AASOに通う子どもたちがAASOや地域の中でいかに自分を位置付けているのか、どのように自他の境界線を引いているのかを、子どもたちの日常生活の中から明らかにすることを目的とする。

2. 理論的枠組みと先行研究

2.1. 理論的枠組み

2.1.1. アイデンティティに関する研究

アイデンティティという概念は、フロイト派の社会心理学者、エリック・エリクソンによって広く世に知られることになった。エリクソンは、アイデンティティの統合を青年期に到達すべき規範ととらえた。

エリクソンの理論は、後に本質主義として批判され、アイデンティティを他者との差異によって構築される、より流動的なものとしてとらえる構築主義的な論者が現れた。そのひとりであるスチュアート・ホール (2001) は、「誰がアイデンティティを必要とするのか?」という反語的な問いを投げかけ、アイデンティティを問うことの権力性を指摘した。ホールは、他者化された人々、すなわちマイノリティこそが、アイデンティティを示すことを求められるのであり、アイデンティティとは、言説やマジョリティとの関係性の中で構築される多元的で葛藤的なものであることを強調した。

こうしたホールの考え方をよく表しているのが、位置取り (positioning) という概念である。ホールは、人は、言説空間の中に位置づけられ、かつ、その中で主体的に位置取っていくと考えた。その際には、ある特定の差異に着目され、それをめぐって自己と他者との境界線が引かれていく。しかも、その境界線のこちら側とあちら側に分配される権力は、平等ではない。したがって、常に境界線の引き直しを試みられるのである。

本稿では、こうした位置取りという概念を用いつつ、AASOの子どもたちが他者との関係性の中でどのように自分を位置付けていくのかを、子どもの日常生活の中からとらえていきたい。

2.1.2. ポピュラーカルチャーに関する研究

ジョン・フィスク (1998) によれば、ポピュラーカルチャー (大衆文化) とは、従属的立場にあって、主導権を奪われたさまざまな層の人々によって生みだされる文化である。それは、体制の内側や底辺から生みだされるものであり、外部や上から押し付けられるものではない。類似の概念として、サブカルチャーは、ポピュラーカルチャーよりもさらに下位の集団によって形成される (成実, 2001)。具体的には、ロックミュージシャンやゲイといった、一般的な社会的価値とは異なる価値体系をもつ集団によって作り出される文化である。そこには、価値観、信条、行動様式、服装、ことばづかいや身振りなどが含まれる。ポピュラーカルチャーやサブカルチャーは、しばしば、社会への抵抗という側面をもっている (フィスク, 1998)。

また、ポピュラーカルチャーやサブカルチャーは、自己を規定し、他者との境界線を引くために利用される。換言すれば、人々は、ポピュラーカルチャーやサブカルチャーを通して、他者の視線の中でアイデンティティを構築していく。成実 (2001) は、都市という匿名の空間

の中での可視化のために、サブカルチャーが特有のスタイルやコスチュームをもつことを指摘している。彼によれば、「族」と呼ばれる人々が一種のユニフォームにも似た画一的なスタイルにこだわるのは、身体を誇示するためであるとともに、自らの曖昧なアイデンティティに一定の意味を与え、自己を肯定するためである。つまり、アイデンティティの発露としてスタイルがあるのではなく、スタイルを通してアイデンティティが形成されていくのである。

よって、本稿では、マスメディアの中でアメラジアンがどのように表象されているのか、あるいはまた、子どもたちが漫画やポピュラー音楽などを通して、どのように自己と他者のあいだに境界線を引いていくのかを明らかにする。

2.2. 子どもの位置取りに関する研究

現代日本において、子ども同士の関係の中での位置取り方を扱った研究は複数ある (上間, 2002; 池田・渋谷, 2003; 鈴木・本田, 2012; 知念, 2012)。そこでは、不平等な力関係が指摘され、教師がどのように子どもたちに介入していくのかが問われてきた。

子どもの位置取り方に関する研究の中には、ナショナリティやエスニシティ、文化といった差異に注目したものもある (渋谷, 2001; 佐藤・小林, 2006)。そこでは、マイノリティの子どもたちが、英語力や外国とのつながりなどを通して、学校や社会におけるマジョリティと交渉したり、抵抗したりするさまが描かれている。たとえば、山本 (2002) は、ロンドン在住の中国系二世代の多様な文化的アイデンティティ形成過程に注目している。すなわち、思春期には親との関係が、高等教育期間では友人関係や香港での経験といった個人史が、アイデンティティ形成に影響を及ぼし、英中両方の文化の中で、自己の位置取りが選び取られている。つまり、個人は既存の文化を内面化することによって文化的アイデンティティを形成するだけでなく、周囲の人々との日常的な相互関係の中で、固定的な文化概念に基づく言説によって押しつけられた意味を読み替えて、自己の位置取りを選んでいくのである。

2.3. アメラジアンアイデンティティに関する研究

アメラジアンアイデンティティをめぐっては、ふたつの立場がある。ひとつは、アメラジアンを、アメリカ人でも日本人でもあるダブル・アイデンティティをもつ (べき) 者とみなす立場である (照本, 2001)。ここでは、ハーフという言葉は、完全ではなく半分、という消極的な意味合いがあるととらえ、父母両方の文化遺産をもつダブルという呼称が主張されている (多久和, 2009)。この立場は、自覚的か否かに関わらず、文化や

民族の本質性を前提にしていることが特徴である。そして、母語習得やふたつの文化への帰属意識を規範とした、実践志向の強い言説であることが多い。

もうひとつの立場は、アイデンティティを常に流動する複合的なものとしてとらえ、アメラジアンが育った状況・現実をふまえてアイデンティティを分析しようとするものである(重松, 2002; 野入, 2005)。ここでは、アメラジアンのルーツを本質的にとらえるのではなく、生まれ育った社会との関連性に着目している。本研究の立場は、こちらに近い。

これまで、アメラジアンのアイデンティティに関する先行研究は、主に成人を対象にしており、青少年を対象にしたものは少ない。そこで、本研究では、よりアイデンティティの揺れを強く感じているであろう思春期の子どもたちを対象に、アメラジアンのアイデンティティ形成に自覚的な教育を行っているAASOに通っている子どもたちを対象に調査を行う。

3. 社会におけるアメラジアンへのまなざし

アイデンティティが言説空間における関係性の中で構築されるのであれば、アメラジアンのアイデンティティを考える際には、アメラジアンをめぐってどのような言説が取り巻いているのかを明らかにしなくてはなるまい。そこで、本章では、子どもや若者にとりわけ強い影響を及ぼすと考えられるマスメディアにおけるアメラジアンの表象を分析する。

大城(2014)は、AASOの報告書がまとめている新聞記事をもとに、アメラジアンに関する記事133件を分析している。その結果、全国紙や沖縄以外の地方紙では、アメラジアンは米軍基地と関連して沖縄特有の問題として説明されることが多く、地域社会からの疎外や学校での差別や偏見など、ネガティブなイメージで描かれているものもあることが明らかになっている。一方、沖縄の地方紙では、アメラジアンと米軍基地との関連への言及は少なく、AASOの活動内容を前向きに伝えていることが多い。ここから、全国的なアメラジアン言説は米軍基地と結び付けられた社会問題としてとらえられる傾向があるが、沖縄地方紙におけるアメラジアン言説は、より共感的で日常的であることがわかる。

新聞がより客観的に事実を報道しているのに対して、テレビや雑誌といったメディアは、より大衆に訴えるメッセージを伝えており、より社会的な意味やイメージが反映されている。そうしたマスメディアにおいては、近年、いわゆる「ハーフ」と呼ばれる芸能人の活躍が目覚ましい。岡村(2013)は、「混血児」から「ハーフ」への呼称の変遷を跡付けている。不純さを示唆する前者から、軽やかで西洋風な後者へと呼称が変化したことに

あらわれているように、そのイメージも、よりファッションナブルで好ましいものに変貌している。

大城(2014)は、大宅壮一文庫雑誌記事索引検索を使って、「ハーフ」という言葉から分析対象記事を検出し、社会的な「ハーフ」像を分析した。なお、「アメラジアン」ではなく「ハーフ」で検索したのは、前者は大衆社会においてはいまだ十分に普及していないためである。

選出された記事は、「ニューハーフ」や「ハーフマラソン」等を除いた、外国にルーツをもつ者という意味の「ハーフ」に限ると、41件であった。そのうち、メイク特集における記事は25件、それ以外の記事は16件であった。前者は、2008年以降の女性誌に集中しており、メイクでいかに「ハーフ顔」に近付けられるかが事細かに説明されている。後者においても、「ハーフ」の容貌の人氣に言及する記事がほとんどである。ここからは、「ハーフ」の容貌が、若い女性たちの羨望と模倣の対象になっていることがわかる。

ただし、「ハーフ」の中にもランク付けがある。ヘフェリン(2012)は、その分類の規準として、容姿、語学力、財力の三つの要素を挙げている。彼女によれば、憧れの対象となる「ハーフ」とは、外見が白人・西洋的で、英語に堪能、裕福な人物である。しかし、最近では、英語が全くできないことをあえて誇示して笑いに変えようとする「ハーフ」芸人がいるなど、より広い「ハーフ」像が受け入れられるようになってきていると考えられる。

以上から、社会におけるアメラジアンの表象について、三つの特徴を挙げるができる。第一に、全国的な新聞紙上においては、アメラジアンは米軍基地と結び付けて説明される傾向があることである。第二に、沖縄の地方紙には、生活者としてのアメラジアンにより寄り添った、別の語り方があることである。第三に、大衆メディアにおいて「ハーフ」は、むしろ、羨望の対象となっていることである。ただし、そこで望ましいとされる「ハーフ」像には、人種的、文化的、経済的な偏りがあることには留意が必要である。

4. 研究の方法と対象

本稿が調査対象とするのは、アメラジアンの子どものもつ母親たちによって設立された全日制の民間教育施設、AASOである。本スクールは、調査を行った2013年度に、設立15周年を迎えた。調査当時の校長は、設立者でもありアメラジアンの子どものもつセイヤーみどり氏である。

第一筆者・大城(以下、観察者)は、AASOの子どものもつどのように他者との境界線を引き、どのような位置

取りを行っているのかをみるために、AASOにおいてフィールドワークを行った。具体的には、大学の長期休暇を利用して、2011年から3年間ボランティアスタッフとしてAASOに関わってきた。今回の調査で利用するデータは、2012年8月6日から9月28日、2013年2月21日から3月20日、同年7月22・23日、同年9月12日から30日の期間に、AASOの休日を除いた週5日間、8時半から18時半まで子どもたちを観察した際に得たものである。活動中は、ボランティアスタッフとして参与しつつ、可能な限りフィールドノーツを取った。その上で、活動終了後ただちにより詳細なノートを取った。本稿で着目するのは、およそ小学6年生から中学3年生までの子どもたちである。観察した複数のクラスでは、それぞれ15名程度の子どもたちが在籍していた。ほとんどのクラスで、男子の人数が多い傾向があった。

プライバシー保護のため、本稿では、対象者はすべて仮名を用いる。フィールドワークの中で知り得た情報は少なくないが、AASOは少人数のスクールであり、個人の特定が容易なため、あえて個人情報の詳細は記載していない。ただし、仮名の頭文字で人種やエスニシティを表示する。すなわち、白人系アメリカ人にはW、黒人系アメリカ人にはB、フィリピン系アメリカ人にはP、イスラム系生徒にはA、南米系アメリカ人にはSで始まる仮名をつけている。

5. AASOにおける子どもたちの位置取り

ここでは、フィールドワークをもとに、AASOの子どもたちがどのように自己と他者との線引きをしているのかを分析する。以下では、境界線を引く際に用いられている要素ごとに分類して示す。

5.1. アメリカ人／日本人／アメリカ人をめぐる位置取り

まず、AASOの子どもたちが、アメリカ人、日本人、そして、アメリカ人をどのように語っているのかを分析する。

5.1.1. 体格・格好について

Peggy, Wanda, Wendyの3人の女子は、日本の漫画やアニメが好きで、休み時間にその話題で盛り上がっている様子が頻繁に観察された。次に挙げるのは、Peggyが描いた「黒子のバスケ」⁽¹⁾のキャラクターの絵をWandaとWendyが見ながら、そのキャラクターのよさを語った後に続く会話である。

大城：やっぱり、みんな部活してる人に憧れるの？

Peggy：スポーツの人たち嫌だ。汗が汚い。

大城：ええ。そうなの。

Peggy：Japaneseのタンクトップはいやだ。アメリカ人はいいけど。

Wendy：ああ、わかる。なんか、Japaneseでひよろひよろしてる人とかいたら気持ち悪いけど、アメリカ人だったら普通。

Wanda：なんか、ある程度のマッチョがいい。腹筋とか。

Peggy：あと、髪もnaturalがいい。Japaneseの人、髪そめるさー。あれ、意味わからん。

(2012年8月14日)

鈴木・本田(2012)は、スクールカーストの上位層にいる人の多くは、運動部に所属し、成績がよく、女子グループからの人気が高い傾向にあることを指摘している。AASOには、日本の学校のように毎日行われる部活動はなく、部活動の存在は身近ではない。しかし、AASOの子どもたちは、日本の漫画などを通して、部活動のイメージを形成しているものと考えられる。3人の女子たちは、日本の学校のバスケットボール部で活躍する漫画のキャラクターへの憧れを語る一方で、部活動をしている人(おそらく日本人)一般については、「汗が汚い」と否定的な発言をしている。

さらに、彼女たちの会話は、「アメリカ人」と“Japanese”の男性批評へと発展していく。彼女たちは、“Japanese”がタンクトップを着たり、髪を染めたりすることに対しては批判的であるが、同じことをアメリカ人男性がする場合には肯定的である。ここから、彼女たちは、「アメリカ人」の服装やヘアスタイルについては寛容であるが、“Japanese”に対しては制約を設けていることがわかる。また、「アメリカ人だったら普通」という発言からは、「アメリカ人」を規準としていることがうかがわれる。「髪もnaturalがいい」という発言は、日本人でありながら黒髪でないことは“natural”でないにとらえる一方で、染色していてもアメリカ人であれば“natural”とみなす可能性も示唆している。今一步解釈をすすめるならば、明るい髪色は、たとえ染めているにしても、「アメリカ人」には自然のものとして認められるものの、“Japanese”には許容されず、むしろ、「アメリカ人」の物真似として疎まれうる、と言えるかもしれない。

さらに、“Japanese”と「ひよろひよろしてる人」を結び付けて否定的に評しているのに対して、「アメリカ人」は、「マッチョ」と結び付けて肯定的に評している。すなわち、彼女たちは、「アメリカ人」からは体格のよい者を、“Japanese”からは体格が貧弱な者を想起し、前者を後者より好ましく感じていることがわかる。

このことは、次に挙げる2人の中学2年生女子、WinneとWinとの会話からも確認できる。この日、2人

は、風邪気味で体育の時間を見学していた。

Win：見て。Wilma, アメリカ人みたいじゃん。

大城：アメリカ人みたいってどういうこと？

Win：Wilmaみたいな体型のこと。

Winne：なんかたくさん走れそうなかんじ。先生 [大城] みたいに棒みたいじゃない。

大城：棒って？

Win：冗談 [笑]。なんか、WinneとかPenelopeみたいなかんじ。

大城：細いってこと？

Win：じゃあ、Winはデブってことか。

Winne：違うさー。胸があったらアメリカ人みたいってことだわけさ。その逆が日本人みたい。あんまりお尻とかもない。

(2013年9月24日)

ここから、Winneは、「たくさん走れそう」で「胸がある」といった体格のよさを「アメリカ人みたい」とみなす一方で、日本人は「棒みたい」で「お尻とかもない」貧弱な体格であるととらえていることがわかる。このことは、先に挙げた3人の女子生徒たちの、「ひょろひょろしてる」“Japanese”と「マッチョ」な「アメリカ人」というとらえ方に呼応している。男性については「マッチョ」、女性については「胸」「お尻」といった性的な魅力に関連付けられ、日本人よりもアメリカ人がそうした魅力をもつものととらえられていることが指摘できる。

洋服に関しては、数学の外国人教師が着ていた赤いチェックのシャツについて、「洋服、アメリカンじゃん。」(Winne, 2013年3月18日)という発言があった。その場に居合わせたPenelopeは、クラスメイトのWillが青いチェックのシャツを着ているのを見て、「Marine (海兵隊) みたい」と言っている。ここから、彼/彼女たちは、チェックのシャツという服装を、「アメリカン」を結び付けていることがわかる。とりわけ青のチェックから“marine”を想起していることは、沖縄、あるいは、AASOの子どもたちに特有だと考えられる。

AASOの子どもたちの日本人のイメージは、次の会話から垣間見られる。2013年9月17日にPatyが前髪を編み込んでリボンのバレッタを頭に着けていた際、Brunoがそれを見て笑いながら、「Paty, なんか日本人みたいじゃん。先生、俺の塾の女もこんな髪型してるよ。」と述べた。すると、Patyは「今、日本人受けする髪型を [雑誌をみて] 研究中。」と語った。ここからは、手をかけてかわいらしさを強調した髪形が、「日本人みたい」で「日本人受けする」ものであるととらえられていることがわかる。

Patyは、モデル事務所に所属しており、日米両国で活躍できるモデルを目指している。さまざまな雑誌をみながら、彼女が日米のモデルの特徴を語る場面が複数回観察された。彼女は、「日本のモデルはそれぞれにキャラクターみたいのがあって、キャラクターさえあれば、誰でもAKBの人もできるけど、外国のモデルは、常に無表情で人形みたいに洋服をアピールするって感じ。」(2012年9月27日)と語っている。ここから、「日本のモデル」はキャラクターをもち、それで評価される存在である一方で、「外国のモデル」は感情をもたない、「洋服をアピールする」ための存在である、ととらえていることがわかる。先述の編み込みやバレッタのようにヘアスタイルをアレンジすることも、日本人の個性の表現ととらえられているのではないだろうか。

Patyは、好きなモデルとして、道端ジェシカやエリーローズといった、いわゆる「ハーフ」のモデルを挙げている。彼女は、この二人のモデルは「何をしてもかっこいい」と言う(2012年9月27日)。このことは、第3章で述べた、「ハーフ」の容貌を望ましいものとするとならえ方と呼応している。

そうしたとらえ方が、Patyだけでなく、AASOの他の子どもたちにも共有されていることは、次の例から確認できる。Patyがモデルのオーディションを受けたことに関連して、BrunoとWatが、Patyに、オーディションに「他にハーフの人出たか」かを質問した。それに対して、Patyが「あまりいなかった」と言うと、BrunoとWatは、「意外じゃん。だって、日本人より [ハーフの方が] スタイルいいのに。」と口ぐちに述べていた(2012年9月26日)。ここから、「ハーフ」は、モデルとして活躍できるような、「日本人よりスタイルいい」存在としてとらえられていることがわかる。

以上のことから、AASOの子どもたちは、体格や服装、髪形などの外見から、アメリカ人、日本人、アメラジアン境界を引いていることがわかる。そして、アメリカ人は、体格がよく、どんな格好をしても似合う、性的な魅力にあふれた存在として、日本人は、体格がより貧弱で、体力や性的魅力に劣るものの、個々のキャラクターをもった存在としてとらえられている。髪を染めたり髪形に手をかけたりすることも、日本人の特性のひとつとして語られている。

その上で、AASOの子どもたちは、自分たちを、日本人よりはアメリカ人寄りに位置づけているようにみえる。マスメディアにおける「ハーフ」のモデルや芸能人の活躍だけでなく、実際にモデルをしている生徒もいることから、「ハーフ」を外見に優れた存在ととらえる見方は補強されていると考えられる。ただし、「ハーフ」の外見のよさが強調されることは、その人格を無視することと表裏一体であることにも、子どもたちは言及して

いる。

5.1.2. 文化・性格について

次に、文化や性格の側面で、AASOの子どもたちが、どのようにアメリカ人と日本人、アメラジアンを線引きしているのかをみていきたい。以下は、体育の時間のために、徒歩で近所の公園に出向いた日の出来事である（2013年9月24日）。この日、AASOの子どもたちは、偶然、スクールバスに乗ったアメリカンスクールの子どもたちと、公園界隈で遊ぶ地元の公立小学校の子どもたちとに出会った。そして、この二者のAASOの子どもたちに対する態度や、二者に対するAASOの子どもたちの反応は、大きく異なっていた。

まず、アメリカンスクールの子どもたちは、AASOの子どもたちと知り合いでないにも関わらず、スクールバスから明るく手を振った。それに対して、AASOの子どもたちも、大きく手を振ったり、「Hi!」などと明るく呼びかけたりしていた。この時にPenelopeが発した「アメリカ人のノリ」という言葉は、明るく分け隔てなく接する様子を指すものと推測される。

一方、同じ日に、AASOの子どもたちは、道路の反対側から地元の公立小学生が「おーい!」、「バイバイ!」などと手を振っても、一切反応しなかった。「みんなで遊ぼう」という小学生の誘いにも、応じなかった。実は、この小学生たちは、AASOの子どもたちに手を振る前に、彼らを指差しながら、「また、あのガイジン来てるよ」、「“Fuck you”って言ってみ」などと仲間内で小突き合っていた。地元の小学生に対するAASOの子どもたちの態度の冷淡さは、自分たちが「ガイジン」という他者とみなされ、好奇やからかいの混じったまなざしを向けられていると察知したからなのかもしれない。

以上のことから、AASOの子どもたちは、アメリカ人は明るく分け隔てのない文化や性格を有しているのに対して、日本人は自分たちに差異を押し付け、異なる者として排斥しようとする存在としてとらえていると考えられる。

しかし、AASOには、地域に住む日本人の子どもと良好な関係を築いている者もいる。BrunoやWaltは、スケートボードを趣味とする地域の子どもたちと仲がよく、いっしょに遊んだり、スケートボードに関する情報を交換したりしている。このように、共通の趣味を媒介とした関係の場合には、先述の地域の小学生とは異なり、時間や情報を共有し、お互いにとってメリットがある関係を築くことができている。

5.2. AASO内部での位置取り

5.2.1. 黒人／白人という境界線

次に、AASOの内部で、子どもたちがどのような線

引きをしているのかをみていきたい。アメラジアンの子どもたちはアジアにもルーツをもつと考えられるが、今回の調査では、アメラジアンの子どもたちが自らをアジア人とみなす場面は観察されなかった。かわりに、白人／黒人という境界線の引き方がしばしば観察された。AASOの子どもたちのなかで、アジア系とは、主に、中国人やフィリピン人などを指していた。

ところで、AASOの子どもたちは、基本的に仲がよい。以下で述べるように、子どもたちのあいだでは、人種による境界線が引かれることがある。しかし、それを単にいじめや差別と断じることは、観察者の実感に符合しないだけでなく、子どもたちの日常の中に織り込まれた差異をめぐる実践の微妙な加減を描き出すことを放棄することにつながる。そこで、本稿では、早急な価値判断は控えて、フィールドワークで得られたデータに即しつつ、AASOの子どもたちが考える白人、黒人、アジア人について分析していきたい。

AASOでは、黒人系の子ども自らが黒人であることを率直に語り、周囲の笑いを取ろうとする場面が、複数みられた。たとえば、Bobbyは、唐突に目の前にあった麦わら帽子をかぶって決めポーズを取り、「I'm 黒人のルフィ⁽²⁾」とおどけてみせている（2013年3月8日）。また、彼は、理科のヨウ素液のデンプンの実験の際に、ヨウ素液をたらしすぎて青黒くなったパンを高く掲げて、「Paty, 見て!俺たちの国旗。」と大声をあげていた（2013年3月8日）。ここでは、黒い日の丸を、フィリピン系を含めた黒人である「俺たち」の象徴と見なしていると解釈できる。

このように、黒人系の子ども自身が黒人であることをおもしろおかしく語っている場面では、積極的な同調も強い反発も観察されなかった。たとえば、Bobがインターネット上に「Justin Nigger」⁽³⁾をみつけて、BrunoとBillに見せている場面では、居合わせたBrunoとBillは画面を一瞥しただけで、特に反応していない（2013年3月19日）。すなわち、黒人系の子どもが持ち出した人種をめぐる冗談は、黒人系の友人たちには、享受されるわけでも、反発や否定にあうわけでもなかった。

白人系の子どもが人種をめぐる冗談じみたことを言う場合にも、ただちに反発や否定にあうわけではなかった。たとえば、Waltが卒業式のスピーチの原稿にBobのことを“beans”と表記していたことについて、観察者が尋ねた場面がある。

大城：なんでBobはビーンズなの？

Walt：Nigger likes coke and chicken.

Bill, William：[爆笑]

Wendy：ああ。それ、聞いたことある [笑]。なんか偏見みたいなやつ。黒人はチキンが好きっていうやつ。

Wanda：中国人だったら目細いみたいなの。

(2013年3月19日)

ここでは、“nigger”という、一般に政治的に正しくないと言われる言葉が使用されている上に、「黒人はチキンが好き」というステレオタイプが語られている。にもかかわらず、居合わせた黒人系のBillも、白人系の子どもたちとともにそれを笑い飛ばしている。さらに、この場面からは、白人系の子どもたちのあいだで、こうした言い方が「偏見」であることが意識され、合意されていることがわかる。ここで、AASOの子どもたちは、人種に対するステレオタイプを知識として再現してはいるが、それによって黒人を白人より下位に位置する者としてはみなしていない、と解釈できる。

しかし、白人系の子どもの黒人についての語りは、複雑な波紋を投げかけることもあった。たとえば、黒人である担任との関係がうまくいかないWatkinが、「黒人の先生は、白人に厳しくて黒人にはやさしい。マジ、むかつく。」と語った際、BobとBobbyは、「そんなことないよ。白人の先生も白人にやさしいよ。」と弁明していた。それでもWatkinの不満はおさまらず、「おまえらが黒人だからわからないんだよ。」と強い調子で言い放った。そう言われた2人は、困り果てた表情になっていた(2013年3月8日)。

ここでは、黒人教師は「黒人にはやさしい」というWatkinの言い分に対して、BobとBobbyは、白人教師も同様に「白人にやさしい」と言い返すことで、お互いさまであることを示そうとしているようにみえる。しかし、そうした見方をWatkinは受け入れず、黒人教師の態度への不公平感を持ち続けている。ここでは、「おまえらが黒人だから」という彼の言葉に象徴されるように、子どもたちは黒人か白人かによって二分され、対立構造の中に位置づけられている。

また、男子たちがグループ内で映画の話をしていた際、BobがWaltに、「黒人は、映画でいつもはやく死ぬ。」と、笑いながら話していたことがあった。これを受けて、Waltは、「確かに。俺たち白人が最後まで生き残って、黒人は死ぬもんな。」と、笑いながら言った。それを聞いたBobは、無言であった。その後、Waltが「冗談、冗談。」とBobの肩をたたくと、ようやくBobに笑顔が戻った(2013年3月12日)。

ここでは、Waltが、「俺たち白人」という言葉で、Bobを含む黒人とのあいだに明確な境界線を引いた上で、前者を「最後まで生き残る」者、後者は「死ぬ」者と意味づけようとしていることが確認できる。そして、この話題はBobから言い出したことであり、当初は必ずしも批判的な意味合いは込められていなかったにもかかわらず、Waltがそれを追認することは、「冗談」である

ことを強調しない限り、受け入れられにくいものになっていることがわかる。

こうした事例からは、第一に、AASOの子どもたちは、だれが「黒人」で、だれが「白人」であるかを、明確に意識し、その認識はひろく共有されていることがわかる。ここでは、共通して日本人の血をひいていることや、アメリカ人と日本人との「ダブル」であることなどは意識されず、文字通り白黒のはっきりした、二項対立的な認識が席卷している。

第二に、AASOの子どもたちのあいだでは、人種をめぐる発言が受け入れられるか否かは、おおいに文脈に依存していることがわかる。一方的に人種による不平等を強調することは、別の立場にある者からは受け入れられにくい。また、黒人であることを笑いのネタとすることは、発言者が黒人系である場合には受け入れられやすいが、白人系である場合には、葛藤を招くこともある。AASOにおいて、黒人系の子どもたちは、自ら「黒人」と名乗ることに躊躇はないが、白人系の子どもによって区別され、かつ、黒人側に否定的な意味が付されることには不快感を示すこともあった。

AASO内では、基本的に子どもたちの人間関係は良好であり、それゆえにこそ、率直な表現がしばしば観察された。前述のように、本稿は、人種をめぐる発言をただちにいじめや差別に結び付けようとするのではない。むしろ、アメラジアンという共通性が強く打ち出された集団の中でも、黒人／白人という線引きが頻繁に行われていること、安定した信頼関係の中でなお、人種をめぐる発言は立場を二分しやすいことを指摘したい。

5.2.2. アジア系／アメリカ人という境界線

では、AASOにおいて、アジア人であることはどのように語られているのだろうか。アメラジアンの子どもたちは、その名が示す通り、アジアにつながる者として定義されている。しかし、興味深いことに、AASOにおいては、アジア人というカテゴリーが、自分たちを指すものとして子どもたちに積極的に使われるようすが観察されることはなかった。むしろ、アジア系というカテゴリーは、自分たちをアメリカ人とみなした上で、アメリカ人との対比の中で使われていた。

社会科の時間に、普段自宅でみるニュース番組について話題が及んだ時のことである(2013年3月18日)。WarrenがAFN⁽⁴⁾を観ると答えたのに対して、Abrahamが「AFNは何？」と質問を投げかけた。Abrahamは、両親が非英語圏出身で、イスラム教徒の生徒である。このAbrahamの問いを受けて、Warrenは、Wesleyといっしょに、“He doesn't know AFN!”と大声ではやし立てた。そして、「アジア系は、基地のことが全然わからない」と言った。その後、彼は、Wesley

やWyattと米軍基地内のスーパーマーケットの話で盛り上がり上がっていた。

ここでWarrenは、WesleyやWyattと共に米軍基地と近い「われわれ」を作り出し、米軍基地に関する情報やアクセスをもたないAbrahamを「アジア系」として切り離している。ここでは、Abrahamがアジア人であることは、米軍基地関連の事象に疎いことと結び付けられている。

同日、Warrenは、観察者に対して、米軍基地に入れるか否かを尋ねてきた。観察者が「入れない」と言うと、「やっぱりAsianだから、Abrahamみたいに基地に入れない」と、冷やかすような口調で言った。ここでも、Warrenは、アジア人を米軍基地の中に入ることができない者とみなし、入ることができる自分たちよりも一段下にみていることが確認できる。

ここで、Warrenのもつ「われわれ」意識が何かは明言されていない。現実には、米軍基地内の施設を利用できるのは、アメリカ人一般ではなく、米軍基地関係者およびその家族である。しかし、Warrenは、「アジア系」というカテゴリーを対置していることから、ここでの「われわれ」は、軍関係者であることよりも、「アメリカ人」であることを示していると推測される。ここからは、米軍基地へのアクセスが特権とみなされ、アジア人はそこから排除されるものととらえられていることがうかがえる。AASOはアメリカとアジアの双方にルーツをもつことを標榜する教育機関であるが、実際には内部は多様であり、アメリカとアジアをめぐって子どもたちの中で線引きがなされていることがわかる。

5.2.3. 沖縄人／本土人という境界線

AASOの子どもたちの多くは、血縁的にも成育歴的にも、沖縄とのつながりが強い。AASOの子どもたちは、本土の人との関係で沖縄人をとらえ、しばしば級友や自らのことを沖縄人と規定していた。祖父母と暮らしているWilmaは、休み時間に級友たちにかりんとうを配り歩き、受け取らない観察者に対して、「ダメだよ、先生も食べないと。『かめーかめー攻撃』するよ。」とやった。それをみた周囲の子どもたちは、「沖縄のおばあーみたい」と笑った（2013年9月18日）。

「かめーかめー攻撃」とは、沖縄の高齢者が、孫や家族、客人に対して、何でも食べるように強引にすすめることをあらわしている。熱心に食べ物をすすめるWilmaの姿からは、彼女が共に暮らしている祖父母の生き様を継承していることが推測できる。くわえて、そうしたWilmaを「沖縄のおばあー」に結び付ける子どもたちもやはり、地域の文化に触れながら生きていくことがわかる。さらに、この場での共感的な笑いからは、彼女たちが、「沖縄のおばあー」や、それに繋がる級友たちを、

親しく、かつ、好ましいものと感じていることが推測できる。

AASOの子どもたちが沖縄人と本土の人を区別する際に参照する要素のひとつは、沖縄の方言を使うことである。廊下で誰かが「アガッ⁽⁵⁾」と言うのが聞こえた際、Watは観察者に「『アガッ』って、ないちゃー⁽⁶⁾使うの？」と尋ねた。観察者が「使わない。」と答えると、Watは、「あれ？ Simmonは使わない？」と述べた（2013年7月23日）。Simmonは、日本で生まれ育った、南米にルーツをもつ者である。ここで、Watは、Simmonは沖縄方言を使わないという理由から、うちなんちゅ、すなわち沖縄人ではない、「ないちゃー」とみなしていることがわかる。

また、Winは、Winnieの腕に毛が全くないことに驚いていた。そして、そのことを、Winnieの母が沖縄人でないことと関連付けていた。Winは、自らの腕の毛を見せて毛深いことを強調し、自らのことを、「沖縄人はやばいよ」と言っていた（2013年9月18日）。ここで、Winは、母が沖縄出身である自らを「沖縄人」と呼び、体毛の濃さという身体的特徴と結び付けている。明言はされていないが、「やばいよ」という表現からは、体毛の濃さが否定的にとらえられていることが推測できる。

また、AASOの子どもたちは、沖縄よりも楽しいところとして本土を想像しているようすが垣間見られた。たとえば、Winnieが「日本は沖縄より楽しいところで、物もたくさんあるし、遊ぶところもありそう」と語ったのに対して、WinとBethは賛同している（2013年9月18日）。ここでの「日本」は、本土を指すと解釈できる。沖縄を日本に含めず、日本と対置するかたちでとらえた上で、沖縄よりよい場所として本土が想像されている点が注目される。

このように、AASOの子どもたちが級友や自分を沖縄人とみなす場面は、しばしば観察された。彼ら／彼女たちは、本土人との対比の中で沖縄人をとらえ、行動様式や言葉、身体的特徴を両者のちがいとみなしていた。沖縄を本土よりも下にみなすような事例もなくなかったが、それは必ずしも差別や卑下ではなく、むしろ、親近感を示しているようであった。

5.3. ポピュラーカルチャーをめぐる位置取り

5.3.1. 漫画からみる文化の選択

では、AASOの子どもたちは、ポピュラーカルチャーをめぐるのはどのように自己と他者を位置づけているのだろうか。AASOでは、休み時間になると自宅から持ってきた漫画を読む子どもが散見され、性別にかかわらず少女漫画も少年漫画も読む者が少なくなかった。そこで、本項では、子どもたちがどのように漫画を選んでいるのかに注目しながら、日米の文化選択につい

て考察していく。

中学3年生のWendy, Peggy, Wandaの女子3人の趣味は、漫画を読むことであった。休み時間には、絵を描いてお互いに見せ合ったり、漫画のあらすじや感想を話し合ったりしているようすが頻繁に観察された。彼女たちが挙げる漫画は、『ホリック』や『黒子のバスケ』、『夏目友人帳』といった日本の作品であった。以下からは、彼女たちがどのような理由で日本の漫画を選択しているのかを知ることができる。

大城：そういえば、アメリカの漫画は見ないの？

Wendy：私は[アメリカの漫画は]あんまり好きじゃない。なんか、絵がうるさい。

Peggy：わかるー。あと、絵がなんか気持ち悪い。

大城：え？どうということ？

Wanda：あれでしょ。ジョジョ⁽⁷⁾みたいに、筋肉の線、描き過ぎててキモイ[気持ち悪い]。こんなの。[ジョジョのポーズを取る]

Wendy：あー。なんだろう。それもあるけど、私は色遣いが好きじゃない。[興奮しながら]先生、マーヴェル⁽⁸⁾とかのコミック系があるさ。あー、アベンジャーズの会社。

大城：うん。[首を縦にふる。]

Peggy：わかるー。お父さんは好きみたいで、家にあるからたまに読みはするけどさ。あんまり好きじゃない。

Wendy：[興奮しながら]あー、わかる。なんか知らんけど家にある。

大城：色遣いとか絵が好きじゃないんだ。内容は？

Wendy：うーん。内容は、原作[漫画]は好きじゃないけど、映画は好き。

Peggy：わかる。日本[の漫画]は、映画にしたらおもしろくない。

大城：え？そう？なんで？

Wendy：あっち[アメリカ]の方は、映画になると、派手で爆発とかするし。あー、何だろう。

Wanda：アクションとかもすごい。

Wendy：そうそう。なんか、アメリカの方は、原作[漫画]を映画にする時は、キャラクターは残すけど、映画用にまた話を作ってるって感じ。だから、映画にするとおもしろい。で、日本の方は、原作[漫画]に忠実に再現しすぎて映画が作られるから、おもしろくない。

Peggy：確かに。日本so地味。それに、出てる人[映画の出演者]、イメージにあってない。だらだら話、続くだけ。[声を荒げて] So boring.

大城：そう？たとえば？

Wendy：『今日、恋をはじめました』⁽⁹⁾とか、出てる女の人がイメージと違うから嫌だあー。[叫ぶ]

(2013年3月5日)

この会話からは、彼女たちが日米の漫画や映画を比較しつつ、自らの嗜好にあわせて選び取っていることがわかる。彼女たちは、日本の漫画を好んでいるが、それは、アメリカの漫画の情報が入らないためではない。生まれてからずっと日本に住んでいる彼女たちの家にもアメリカの漫画はあり、目に触れる機会がある。それでも、絵の描き方や色遣いが好きでないという理由で、アメリカの漫画には夢中になれないと言う。同時に、彼女たちは、漫画を映画化した場合のアメリカ作品のおもしろさと日本作品の退屈さを、具体例を挙げながら詳細に語っている。このことから、彼女たちは、日米双方のポピュラーカルチャーの特徴を把握した上で、自らの嗜好に合わせて取捨選択していることがわかる。

同様のことは、級友からアニメに詳しいと目されているBobbyについても言える。彼は、「家で、アニメフリックで面白いアニメとか探してる」と言う。アメリカのアニメは見ないのかを尋ねると、「一度見たけど全くおもしろくなかったから、日本のものしかみない。」と答えていた。彼によると、アメリカのアニメは「単純」で、「正義のヒーローと悪役しかなくて、いつもヒーローが勝つ」とのことだった。逆に、日本のアニメは、複雑で話がおもしろい、とのことだった(2012年9月20日)。

漫画好きの女子3人が卒業した後の2013年度には、中学3年生の男子を中心に、『暗殺教室』⁽¹⁰⁾という漫画や『進撃の巨人』⁽¹¹⁾を原作にしたアニメが流行っていた。ともに、日本の作品である。『進撃の巨人』の原作漫画は、登場人物のセリフが比較的多く、熟語や戦闘に関する単語が多いためか、日本語の読み書きがあまり得意ではないWillは、「アニメの方がおもしろい」と観察者に語っていた(2013年3月14日)。

この時期、AASOの子どもたちの会話の中でよく使われていた言葉に、「中二病」がある。「中二病」とは、現実なのか空想なのかの境界線がつかない、中学二年生によくある現象を表している。たとえば、集団内で周りとは異なる発言をした者を揶揄する際に、「中二病」という言葉が使われていた。一般的に普及しているわけではないこの言葉は、漫画好きな子どもたちが、漫画から得て使っていた言葉である。Watによれば、「去年(2012年)の先輩たちが残していったAASOの伝統」とのことだった(2013年3月14日)。これは、漫画をきっかけにしつつ、子どもたち自身が友人関係の中で構築した文化の一端ととらえることができる。

以上のことから、AASOにおけるポピュラーカルチャーをめぐる位置取りについて、ふたつの特徴を挙げることができる。一点目は、AASOの子どもたちは、日米双方のポピュラーカルチャーの特徴を踏まえ、比較した上で、主体的に選択していることである。知念(2012)は、〈ヤンチャな子ら〉が親と趣味を共有する傾

向があることを指摘しているが、本調査では、むしろ、親の趣味とは独立に、子ども自身が選択していることがうかがえた。二点目は、子どもたちは、既存のポピュラーカルチャーに触発されながら、友人関係の中で自分たちの文化を構築していることである。彼ら／彼女たちは、単に日米のいずれかの文化を選択するだけではなく、それらを利用しながら、「AASOの伝統」を創り上げていた。

5.3.2. 音楽による境界線の変容

AASOの男子中学生には、ギターやベース、ドラムを趣味にしている者が多い。部活動でのバンドや、学校行事での演奏も盛んである。楽器演奏を共通の趣味にする子どもたちは、休み時間になると、好きなアーティストや音楽の情報を交換したり、youtubeを見て練習した成果を見せ合ったりしていた。彼らは、ヘヴィメタル音楽、ロック音楽、テクノ音楽といった好きな音楽の種類によって、お互いに線引きを行っていた。その中で、ヘヴィメタル音楽⁽¹²⁾をめぐるのは、以下のような友人関係が観察された。

2012年度に観察されたヘヴィメタル仲間は、Watkin, Wolfgang, Will, Waltの4人の白人生徒であった。彼らがヘヴィメタル音楽を好きになったきっかけは、父親であった。特にWatkinは、父親の影響でアメリカのヘヴィメタルバンド「メタリカ」が大好きで、来日時には父親と東京までライブを観に行ったほどである。そのライブでヘッドバン⁽¹³⁾をするために髪を伸ばし続けたことから、彼の熱心さがうかがえる。

Watkinの長髪に象徴されるように、ポピュラーカルチャーにはしばしば特定のファッションスタイルが結びついている。母親に一喝されてWillが髪を切ってきた日、Watkinは一日中不機嫌であった。Willが母親に抵抗できなかったことを弁明しても、「しらける。ありえない。」と責め続けた(2013年3月11日)。ここから、Watsonにとって長髪は、ヘヴィメタル音楽を愛する自らの証であり、ヘヴィメタル音楽を通じたWillとの友情の証でもあったと解釈できる。髪形と同様に服装にもシンボリックな意味が込められており、ヘヴィメタル仲間はしばしば、黒地にバンドのロゴが入ったTシャツを着ていた。

また、ヘヴィメタル仲間のあいだには、特有の行動様式が観察された。ヘヴィメタル音楽では、罵り言葉やタトゥーなど、社会的によくないと思われる行動様式が使われていることがあるが、ヘヴィメタル仲間たちは、そうした言葉やサインを「俺たちの」ものとして、あえて使用し、誇示していた。

Watkin：見て、先生。[FUCK METAL M3Tと左腕に黒

マジックで書いたものを見せる。]俺のTATOO! かつこいいでしょ。

大城：なんじゃ、そりゃ。ダメでしょ。止めなさい。

Will：先生、なんで悪い言葉わかるの？

大城：なんとなくわかるでしょ。

Walt：見て、先生。俺も。[一本一本の指にFUCKと書いた左手の拳を見せる。]

Will：[左腕にニコちゃんマークを書いたものを見せながら]これ [is it] おもしろい？

大城：そうきたか [笑]。もう、とりあえず早く消しといて。

Watkin：はあ？ 先生、これ、俺たちのタトゥーだよ。

大城：どうみてもマジックでしょ！手洗ってきたら [課題の] カルタ [づくり] はじめるよ。

(2012年8月13日)

同様のことは、次の事例からも観察できる。

Walt：[筆箱にFUCK THE POLICEと書く。]

大城：それ何？

Walt：これは、俺たちのロゴ。

大城：そうなんだ。なんか、Waltたち、使っちゃいけない言葉好きだよな。

Walt：はっ。悪い？ [机をたたいて怒ったふりをし、薬指を立てて中指を立てたかのように見せる。] うっそー。

大城：なんでわざわざ悪い言葉使うのかなと思って。だって、先生に怒られちゃうのにわざわざ使ってるから、なんでだろうと思って。

Walt：俺らはヘヴィメタだから、別に使っていいんだよ。[メロイックサインをしながら舌を出す。]

(2013年3月5日)

こうした事例から、ヘヴィメタルという音楽の下に結集した仲間たちは、ヘヴィメタルらしい髪形や服装、言動を選択することで、自分たちの集団意識を高めていることがわかる。

ところで、2012年度のヘヴィメタル仲間は、白人系アメリカン男子のみで構成されていた。たとえば、WatkinとBrunoとは、いっしょに登校し、放課後も共にスケートボードをするほど仲がよいが、黒人系であるBrunoは、2012年度にはヘヴィメタル仲間には入っていなかった。このことについて、Brunoは観察者に、「ロックは好きだけど、メタルは俺が好きな音楽ではないし、あいつらの音楽だから」(2013年3月19日)と述べている。この話を聞いていたBobは、観察者に、「白人はメタル、黒人 [Black people] はラップっていうのがあるわけさ、先生。」と得意げに教えてくれた。ここから、Brunoの「あいつらの音楽」という言葉は、ヘ

ヴィメタルが白人に属していることを指すと解釈できる。AASOの子どもたちの音楽をめぐる実践には、人種や性別の違いと重なった線引きがなされていることがわかる。

ところが、2013年度に入ってWaltが卒業し、Wolfgangがバンドを脱退すると、代わりにBrunoとBrutusがヘヴィメタル音楽仲間として加わった。観察者がBrunoに加入の理由を聞くと、「あいつ(Watkin)がバンドしようって誘ってきて、俺たちは友達だから」仲間に加わった、とのことであった(2013年9月18日)。2012年度の観察では、先述の「あいつらの音楽だから」(2013年3月19日)という言葉がBrunoがヘヴィメタル音楽について語った唯一であったが、2013年度には、以下のように、多弁であった。

Bruno: 先生、「メタリカ」知ってる？

大城: うん。バッテリーの人でしょ。

Bruno: おー、先生、俺のことなんでも知ってる。じゃあ、メタルとロックの違いってわかる？

大城: うーん。正直同じように聞こえるなあ。

Bruno: 大学に行ってるのに、そんなのもわからないの。仕方ないな。教えてあげるよ。メタルは、楽器[ベースやエレキギター]重視で、歌詞にあまり意味がないわけよ。で、ヘッドバンするから髪伸ばす。

大城: ああ。だから、Brunoも髪を伸ばしてるわけね。そんなに長い方がいいの？ だって、「メタリカ」の人、髪切っちゃたじゃん。

Bruno: いや、あれは、別。いちおう、髪伸ばしてる方がヘッドバンする時にかっこいいわけさ。

大城: なるほど。他にロックと違うところってあるの？

Bruno: ヘヴィメタは、歌詞にあんまり意味がなくて、楽器[の音]重視。ロックは、その逆で、演奏はヘヴィメタよりは微妙。でも、一応うまい人はいるよ。で、ヘヴィメタは、WatkinみたいなTシャツ着けてから、長ズボン。で、ロックは半ズボン。

大城: なるほど。でも、Bruno半ズボンじゃん。それに、黒Tシャツはどこ？(笑)

Bruno: それは、ちょっと、これはあれさ…(笑)。先生が買ってきてくれれば、俺も履けるよ。先生、買って。

(2013年9月18日)

この会話からは、つい前年までは「あいつらの音楽」として遠ざけていたヘヴィメタル音楽を、Brunoが自分のものとして取り込もうとしている様子がうかがえる。2012年度と2013年度とでは、AASOにおけるヘヴィメタル音楽による境界線の引き方が一変している。具体的には、Brunoという黒人系男子が、ヘヴィメタル音楽仲間の外側から内側へと位置取りを変えている。一般に、

ヘヴィメタル音楽は白人のものとしてされており、2012年度のBrunoは、その通りにヘヴィメタル音楽を「あいつら」、すなわち、白人の音楽としてとらえていた。ところが、2013年度には、親友Watkinの誘いによって、その人種的境界線が揺らいでいる。このことは、AASOにおける音楽仲間の境界線は、社会的影響を受けて人種的な意味合いをもっているものの、固定的ではなく、友人関係によって変更可能であることを示している。すなわち、AASOの子どもたちは、ポピュラーカルチャーの選択によって自らを位置付けたり、他者から位置付けられたりしており、その境界線の引き方は、社会一般の人種的境界と重なっている。ただし、その境界線は固定しているわけではなく、自分たちの仲間関係の中で流動していることがわかる。

6. おわりに

本稿では、AASOの子どもたちが学校内外での人間関係の中でどのように位置付けられ、自らをどのように位置付けようとしているのかを描いてきた。近年、モデルとしての活躍に象徴されるように、「ハーフ」という存在が社会的な憧れの存在としてとらえられている。このことは、AASOの子どもたちの自己イメージにも関連している。彼ら／彼女たちにとってアメリカ人とは、体格がよく、どんな格好をしても似合う存在であり、日本人は、体格が貧弱で容貌を改変しようと試みつつ個性を出そうとしている存在ととらえられていた。また、性格的には、アメリカ人は明るく分け隔てがないのに対して、日本人は排他的だととらえられていた。そして、自分たちは、日本人よりはアメリカ人に近い存在ととらえられていた。

AASOの内部において、子どもたちは、アメラジアンとしての共通性を打ち出すよりも、人種的な差異を示すことが多く観察された。具体的には、一方の親が黒人であるか白人であるかによって、子どもたちは明確に境界線を引いていた。黒人系の子どもたちは、屈託なく「黒人」であることを自認し、冗談にすらしていた。しかし、黒人よりも白人が高く価値づけられる社会的傾向は、AASOにおいてもまったく排除されているわけではなく、白人系の生徒が「黒人」であることを冗談にしたり、否定的に意味づけたりする際には、葛藤を招くこともあった。

アメラジアンとは、定義から言っても、アジアとのつながりを示しているが、AASOの子どもたちは、自らをアジア系ととらえているようすは観察できなかった。AASOにおいてアジアとは、日本以外の国を含む広いエリアを指していた。そして、米軍関係者と対置する中で、アジア系を、基地の中に入ることができず、基地の

情報をもたない者としてとらえていた。

ただし、アジア系としての自覚をもたない子どもたちも、沖縄人という意識は身近にもっている。沖縄人は、方言や言動、身体的特徴などによって、本土人から区別されていた。沖縄よりも本土をよしとする価値観もうかがえたが、生まれ育った沖縄に対する親近感や愛着も観察できた。このことは、米軍基地に関連した社会問題としてアメリカンをとらえがちな全国紙に対して、沖縄の地元紙は、より日常的で共感的にアメリカンについての報道をしていたことと関連するかもしれない。

AASOにおいても、ポピュラーカルチャーは子どもたちの仲間意識を醸成する重要な要素であった。AASOの子どもたちは、家庭の中に日米両方の文化をもっていることが多く、両者を比較しながら好みを主体的に選択していた。ヘヴィメタル音楽については、一般的に白人中心であることが指摘されているが、AASOでもやはり、黒人系アメリカンが「あいつら（白人系アメリカン）のもの」と表現する場面が観察された。しかし、そうした線引きは固定的ではなく、友人関係によってそれを乗り越えていくようすも観察できた。

本稿では、AASOの子どもたちがさまざまな要素によって自己と他者とを位置付けていることを明らかにした。AASOは、アメリカとアジアとにつながるアメリカンの子子どもたちが、ダブルとしてのアイデンティティを肯定的に打ち立てていくことを目指して設立されている。実際に、AASOにおいて、観察者は、子どもたちがのびやかに自己を表現し、他者を傷つけることなく共存しているようすを確認することができた。

しかし、そのことは、AASOには人種やエスニシティ、文化、性別による線引きが皆無であることを指すのではない。「ハーフ」に対する社会的なまなざしは、AASOの中にもしっかり入り込んでいたし、子どもたち自身が、アメリカ人と日本人、黒人と白人、沖縄人と本土の人、といった差異を巧みに使い分けながら、自分たちを位置付けていた。ポピュラーカルチャーは、人種やエスニシティと関連しつつも、子どもたち自身によって選び取られるものとして存在していた。

本稿では、原則としてアメリカンであることによって集結している空間にあって、子どもたち自身は、その空間の外部と自分たちとをどのように位置付けているのか、集団の内部にはどのような多様性があるのかを明らかにした。フィールドワークという手法の限界もあって、筆者らがとらえ得た「現実」は、ひとつの側面にすぎない。ここで挙げた事例を、ただちにアメリカンや「ハーフ」に一般化することは、無論できない。彼ら／彼女たちの位置取りは、今後も他者との関係性の中で変化を続けていくにちがいない。

そのような限界はあるが、アメリカンの子子どもたち

に「お前は何者であるか」と権威的な問いを差し向けるのではなく、彼ら／彼女たちの日常的な行動に寄り添い、自ら語った言葉に耳を傾けることで、文脈に応じて揺れ動く彼ら／彼女たちの位置取り方を描き出そうとしたことは、本稿の独自性であろう。長期間にわたって調査者をあたたかく受け入れてくれたAASO関係者の皆様、とりわけ、子どもたちに深く感謝するとともに、本稿が、彼ら／彼女たちとのさらなる対話のきっかけになることを望んでいる。

注

- (1) 『週刊少年ジャンプ』に掲載されている漫画。高校生の主人公は、黒子のように影の薄い存在ではあるが、所属するバスケットボール部でその特徴を生かし、高校総体で優勝を目指していく、というストーリーである。
- (2) 漫画『One piece』の主人公。
- (3) アメリカの人気歌手Justin Bieberの一般人によるパロディ。
- (4) 米軍基地がアメリカ国外に住むアメリカ人のために編集しているニュースのこと。
- (5) 沖縄の方言で「痛い」という意味。
- (6) 沖縄の方言で「本土の人」という意味。
- (7) 日本の少年漫画『ジョジョの奇妙な冒険』のこと。
- (8) アメリカの漫画出版社で、『スパイダーマン』などの代表作がある。
- (9) 日本の漫画で、映画化された作品。
- (10) 『週刊少年ジャンプ』に掲載されている漫画。
- (11) 『少年マガジン』に掲載されている漫画。
- (12) ヘヴィメタル音楽とは、ロック音楽を発展させた重低音の奏法に重点を置く音楽であり、白人が黒人音楽に憧れ、真似をしたことが起源だとされている(ダニエルズ、2012)。チャールズ(2010)は、「ブルジョアの黒人は白人みたいに歌おうとし、白人は有色人種みたいな歌い方をしたがる」と述べ、ロック音楽の人種性を指摘している。また、Walser(1993)は、ヘヴィメタル音楽がきわめて男性中心であることを指摘している。このように、ヘヴィメタル音楽には、人種や性別をめぐる複雑な関係性が表れている。
- (13) ライブ中に音楽に合わせて頭を上下に振ること。

引用文献

- 池田曜子・渋谷真樹 2003 「学級における資源の活用と友人グループ —小学校でのエスノグラフィーをとおして—」『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』第12号
- 上間陽子 2002 「現代女子高生のアイデンティティ形成」『教育学研究』第69号第3号
- 大城亜梨沙 2014 「アメリカン・スクール・イン・オキナワにおける子どもの位置取り—他者との境界線の引き方に着目して—」奈良教育大学修士論文
- 岡村兵衛 2013 「『混血』をめぐる言説—近代日本語辞書に現れるその同意語を中心に—」『国際文化学』第26号
- 佐藤郡衛・小林聡子 2006 「アメリカにおける日本人生徒のエスニシティをめぐる位置取りの政治—ロサンゼルス地域のA高校のELDを事例にして—」『国際教育評論』第3号
- 重松、S・マーフィ 2002 『アメリカンの子供たち—知られざるマイノリティ問題—』集英社

- 渋谷真樹 2001 『「帰国子女」の位置取りの政治—帰国子女教育学級の差異のエスノグラフィー』 勁草書房
- 鈴木翔・本田由紀 2012 『教室内（スクール）カースト』 光文社
- 多久和祥司 2009 「娘はハーフじゃない、ダブルです」『教育』9月号, 国土社
- ダニエルズ, ニール 2012 『メタリカヘヴィメタル革命』 シンコーミュージックエンタテ
- 知念渉 2012 「〈ヤンチャな子ら〉の学校経験—学校文化への異化と同化のジレンマのなかで—」『教育社会学研究』第91集
- チャールズ, シャー・マリー 2010 『ジミ・ヘンドリックスとアメリカの光と影』 フィルムアート社
- 照本祥敬他編 2001 『アメラジアンスクール—共生の地平を沖縄から—』 ふきのとう書房
- 成実弘至 2001 「サブカルチャー」吉見俊哉他編『カルチュラル・スタディーズ』 講談社
- 野入直美 2000 「沖縄のアメラジアン—教育権保障運動が示唆していること—」山本雅代編者『日本のバイリンガル教育』 明石書店.
- 2005 「フェンスの中のアメラジアン—沖縄の米軍基地内で学び、働く青年のケース・スタディー」『沖縄法政研究』第8号
- フィスク, ジョン 1998 『抵抗の快樂—ポピュラーカルチャーの記号論—』 世界思想社
- ヘフェリン, サンドラ 2012 『ハーフが美人なんて妄想ですから!! 困った「純ジャパ」との戦いの日々』 中央公論新社
- ホール, スチュアート 2001 「誰がアイデンティティを必要とするのか?」宇波彰訳他編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題—誰がアイデンティティを必要とするのか?—』 大村書店
- 山本須美子 2002 『文化境界とアイデンティティ』 九州大学出版会
- Walser, Robert 1993 “Running with the Devil: power, gender, and madness” in *Heavy Metal Music*: Wesleyan University Press